ECHOES

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＣＨＯＥＳ

【Ｎコード】
Ｎ７３３４Ｚ

【作者名】
潤

【あらすじ】
とある高校の軽音部にて繰り広げられる学園青春ものです。
文化祭が発表のおもな場所という。
ときどき別の場所で演奏したりするが。
山びことという意味のバンド名。

あ、別サイトにもＵＰする予定です。

入部

じゃんけんほい。

私はパーをだした。
相手はチョキをだした。
相手はすごく嬉しそうな顔をして去っていった。
「ま、負けた」
「ま、しょうがないよ、葵。
今年も入学式の演奏は吹奏楽部に任せるしかないよ」
「柊…。軽音部の部員こないと廃部だよ」
「でもさー、
ギター2人だけじゃバンドって言えない気がするし…」
「まぁそーだけど…」
これが3月の出来事であった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

高校の入学式。
校長のしょうもない話が終わり、
吹奏楽部の演奏も終わり式終了。
式終了後のとある生徒の会話の一部である。
「美奈ー。何部入る？」
「あぁ、私は軽音部があれば入ろうかな
ってか入学の前に梅と軽音部に入ろうって言ってたろ」
「いやーうちはやっぱ吹奏楽部に
入ろうかなと思ってんだ…」
「梅はどー思う？」

「私はキーボードやりたいから軽音部に入りたい。
どうせなら3人で入ろうよ」
「梅も美奈もかぁ…。
よし今度軽音部の体験いくか！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

新入生が体験入部してもいい時期になった。
「よぅーし、軽音部へ体験行くぞー」
軽音部部室にノックした。
コンコン。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

軽音部部室。
「柊…やっぱ今年は新入生なしかな…」
「葵。そんなこと言っちゃダメだよ」

コンコン。

「ほら、誰か来たよ」
「どーせ吹奏楽部の部長が自慢しに来たんでしょ？」
「もしかしたら新入生かも…」
こほんと咳払いしてから
「柊…でてよ…」
「部長は葵でしょ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「留守なのかな？」

「よし。強行突破だ」
ダン。
扉が開いた。

そこにいたのは2人の先輩だと思う人。
なんか片方がお願いをしているようだ。
「あ、いらっしゃい。軽音部に」
お願いされている方の先輩がいった。
さらにボケるかのように新入生が言った。
「軽音部はここかー！」
「いや、今奥の方の先輩が
『いらっしゃい。軽音部に』
って教えてくれたばかりだろ、松」
「ちょっとボケただけやん、美奈」
「それにいくらなんでも
あの扉のあけかたはないだろ」
えへへと松と呼ばれた
男勝りな女の子は照れた。
「松さんに美奈さんたちは
どうしてここに来たの？」
「体験に来ました」
美奈でも松でもない
もうひとりの女の子が答えた。
「ってことは新入生！！」
「はい」
「葵。来たよ。新入生が！」
「何かやりたい楽器はある？」
「うちはドラムやりたい！」
男勝りな女の子の松。
「私はベースだな」

さっきツッコミをいれた美奈。
「私はキーボードです」
名前で呼ばれたことがまだない女の子。
「悪いんだけどキーボード希望の子の名前は…？」
「あ、はい。
田原　梅です。
さっきドラムやると言ったのが…」
「うちは小野　松。
ドラムやりたい！」
「何回言うんだ、松。
あ、私はベース希望の古川　美奈です」
「そういう美奈だってベース希望って言ってるー」
「あ、ちょうど卒業した先輩たちの
抜けた穴がこれで塞がるわ。
私は奥野　柊よ」
「私が部長の豊橋　葵よ。
いやーこれで廃部は免れるわぁ」
「あの奥野先輩と豊橋先輩は
楽器何してるんですか？」
「ギターよ」
「へぇー」
ということで私ら3人ー美奈、松、梅ーは
軽音部の体験を済まして本格的に入部した。

バンド名

本格的に入部した。
それはいいけど…。
なんか練習：休憩＝３：７って感じで
練習よりも話していることのほうが多い軽音部だった。
そして近づく文化祭。
それに気付いた。
「葵先輩！柊先輩！松！梅！
　文化祭が近いよ」
しっかりものとなっていた美奈が。
「あ…」
みんな口をポカンとあけて気付いた。
「私、歌詞書かなきゃ」
部長の葵が言った。
「それにメロディつけるのが私」
柊先輩が言った。
「ということは今まで私達が練習してきた
　聞いたことないような曲は先輩達のオリジナル？」
「まぁそうね。
　とりあえず歌詞急いで作るから
　テキトーに前の曲練習しといて。
　今年は新曲は１曲でいこう」
「葵、部長らしいことはじめて言ったね」
そんなやりとりを見ていた。
前の曲でテキトーにといわれても
まだ２曲しかやっていない。
「どっちやるんですか？柊先輩」
「そりゃ文化祭を２曲で

終わらせるわけにはいかないから両方やるよ」
「あの私、ベースやりつつ
ボーカルやりたいんですけど」
「あ…どっちの？」
「最初に教えてくれた
“ずっと友達”のほうです」
「ＯＫ。
美奈は歌いながらベースの練習、
後は“ずっと友達”と“ゴメンね”の自主連」
「はい」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「美奈いけた？」
「ベースひきながら歌うのって
むずかしいですけどやってみせます」
タララー♪
キミがそばにいるだけで
チャン♪

「美奈うまいー」
「ありがとうございます」

「でも、“ゴメンね”のボーカルは誰するの？」
葵先輩が歌詞を書きながら聞いてきた。
「う…そういえば……じゃ私が歌うか」
柊先輩が歌うことになった。

「できた！これは私が歌う」
葵先輩が歌詞をかきあげた。

「じゃメロディは頼むよー柊」
「あぁ」
新曲は1曲といいつつ2枚のルーズリーフを柊先輩に渡した。
「えへへ、書いてたら
　楽しくなっちゃって2曲やっちゃった」
「はいはい」
「あ…あのバンド名どうするんですか？」
「あー山びこって意味でECHOESは？」
「いいですね」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

奥野　柊宅。
ほぅー。
今回はこういう系か。
ならこんな感じかなー。
いや、ここはこんな感じだな。
ん〜これでOKっと。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日。
「メロディつけたから練習しといてね」

文化祭

そして迎えた文化祭。
２日目の吹奏楽部の前に発表することになっている。
私達にとって初舞台。
カーテンで締め切られた舞台。
そこで手をのっけてみんな小声でこういった。

「ＥＣＨＯＥＳファイ！」

次は我が校軽音部の発表です。
今年のバンド名はＥＣＨＯＥＳです。
それではどうぞ。

ザワザワ。

私達の初舞台が始まった

夏と秋

夏がずっとならいいのに
夏には夏休み、花火大会、
夏祭りがあるもの

キミに会えなくても
それなりに楽しめる

秋なんて来なければいいのに
衣替えで暑かったり寒かったりするもん

夏ってだけで舞い上がれる
秋は何もないじゃないか

でも
今という瞬間は
今しかないんだから
前に進もう

「1曲目は“夏と秋”でした。
みんなーありがとうＥＣＨＯＥＳです。
私はリーダーでギターの豊橋　葵」
1曲目を歌い終えた葵先輩が曲紹介と自己紹介をした。
「私はギターの奥野　柊」
「私はベースの古川　美奈」
「私はキーボードの田原　梅」
「私はドラムの小野　松」
「それでは2曲目“ただ好きだから”お聞きください」

ただ好きだから

キミに出会えてよかった
こうして聖なる夜に
一緒に過ごせるのだから
ただキミが好きだよ

ボクはどれくらいキミが好きなのかな？
この夜に輝いてる星よりももっともっと…

キミに出会えてよかった
こうして聖なる夜に
一緒に過ごせるのだから
ただキミが好きだよ

眠れない夜にはいつもキミに電話したね
朝日が来るまで話した時もあったね
もうキミしかボクにはいないんだ

キミに出会えてよかった
こうして聖なる夜に
一緒に過ごせるのだから
ただキミが好きだよ

今日だけは言わせてね
心からのＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ

「これで２曲終わりました。
　最後の曲は“ゴメンね”です」

ゴメンね

キミに何度も言った
ゴメンね
別にキミは
ボクのこと
なんとも思ってないよね
だけどさ
ボクは好きなんだ

キミとボクは
ただの知り合い
メールしてるうちに
好きになったんだ

キミに何度も言った
ゴメンね
別にキミは
ボクのこと
なんとも思ってないよね

だけどさ
ボクは好きなんだ
最近考えるのは
キミのことばかり
勝手にキミに
メール送るんだ

キミに何度も言った
ゴメンね
別にキミは
ボクのこと
なんとも思ってないよね

だけどさ
ボクは好きなんだ
いつか言うよ
キミが好きだよ

「残念ながらこれで
私達ＥＣＨＯＥＳの演奏は終わりです」

ガラガラ。
カーテンがしまっていく。

アンコール、アンコール、
アンコール、アンコール、
アンコール、アンコール、
アンコール、アンコール、
アンコール、アンコール。

アンコールの連発だった。
それにＥＣＨＯＥＳ的にも終われない。
まだ美奈の“ずっと友達”が歌われてないからだ。
マイクが再び葵に向けられこういった。

「みんなーアンコールありがとう。
これでホントに最後。
“ずっと友達”
ボーカルはＥＣＨＯＥＳ期待の新人古川　美奈です」

ずっと友達

キミがそばにいるだけで
いつも強くなれていた
いつまでもそばにいたい
この友情はいつまでも
続くと信じていたい

誰かがボクの悪口
言っていたんだ
だけどもキミは
ボクをかばってくれたね

キミがそばにいるだけで
いつも強くなれていた
いつまでもそばにいたい
この友情はいつまでも
続くと信じていたい

例えば世界を
敵にまわしても
ボクとキミは
友達だよ

キミがそばにいるだけで
いつも強くなれていた
いつまでもそばにいたい
この友情はいつまでも
続くと信じていたい

「ホントにみんなありがとう」

ガラガラ。
カーテンが完全に閉まり私達ＥＣＨＯＥＳの舞台は終わった。
そうこのメンバーでの演奏は…。

余韻＋α

文化祭終了後。
楽器の後片付けも終わった。
「ふぅ」
「これで私達は引退ね」
「あ、先輩達受験ですもんね」
美奈が気付いた。
「そうなのよ」
「あー受験なんてやだやだ」
「第1希望受かってくださいね」
「アハハ。頑張るよ」
「あ……」
「どうした、美奈？」
「いや先輩が引退したら
誰がギターひくことになるのかな？」
「そんなの次の新入生に任せたらいいよ。
次の発表は来年の文化祭なんだし」
「それもそーですね」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

いつもの様に部室で練習：休憩＝3：7でいた。
ちょうど今休憩に入ったところに……

コンコン。

誰かが部室をノックした。
私達ははじめてこの部室に来たときを思い出した。

「なぁ、新部長。松、
客でなくていいのか？」
「美奈でてよー」
「また私かよー」
カチャ。
「はい」
「俺は田中　京平だ。
この軽音部に入部したい……
男はダメか？」
「いや、別にいいと思うけど…」
「松ー、梅ー。
新入部員希望だよー」
「うへ、なんでこの時期なのさ」
松が文句たらしつつも扉にやってきた。
「まぁまぁ松。今はなにもすることなくて
困ってたからいいじゃない」
梅はいつも通り上機嫌で扉にむかってきた。
「ま、男子いりゃ力仕事あれば
任せられるからいっか」
「えーと…」
「田中　京平。1年」
「同級生なんだ…」
「まぁ新入部員として部室入りなよ」
「あ…うん」
「で、京平はなんでＥＣＨＯＥＳに入りたいんだ？」
「俺はもともと吹奏楽部にいたんだ。
今まで小学校訪問演奏とか文化祭に出てたんだけど…
なんか吹奏楽部よりもあんたらＥＣＨＯＥＳといた方が
もっと人に感動させられると思うんだ。
だから入りたい」

「そうか…。
じゃ吹奏楽部はやめるということだな」
「あぁ」
「じゃ楽器はギターやってもらっていい？」
「ギター…」
「うん。そー。ギター」
「頑張る」
「コードとかわかるか？」
「ごめん、わからない。
というか軽音楽のことよくわからない」
「まぁ私達もよくわからないことあるしな」
「とりあえずひいてみて。
あ、アンプにさしてね」
「アンプ？」
これと指差した松。
京平がひいてみた。
「ま…まぁ文化祭までになんとかなればいいもの…」
「ごめん、下手で」
「いいよ。これから頑張ろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7334z/

ＥＣＨＯＥＳ

2012年1月14日14時49分発行